法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

『1914年からの100年　宝塚の歴史文化 ： モダニティー、少女文化、ジャパン・ポップ』序文

山梨, 牧子 / YAMANASHI, Makiko

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学
(巻 / Volume)
11
(開始ページ / Start Page)
99
(終了ページ / End Page)
108
(発行年 / Year)
2014-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00022464

『1914 年からの 100 年　宝塚の歴史文化：モダニティー、少女文化、ジャパン・ポップ』序文

山　梨　牧　子

宝塚歌劇団は世界でも珍しく発祥地の名前を冠した劇団である。例えば、ウィーン少年合唱団やニューヨーク・シティ・バレエもあるが、これらに比して宝塚市は小規模であり、実のところ、街の名前よりも歌劇団の名称のほうが今や有名になっている。この女性だけの劇団は、1914 年、阪神間の郊外である小さな湯の町宝塚で生まれた。今日の宝塚市の人口は僅か 20 万に過ぎないが、歌劇団は全国で毎年千回以上の公演をプロデュースし、延べ 250 万人の観客を動員している(註 1)。まさに、宝塚歌劇団は日本最大級の劇団のひとつというばかりでなく、世界的にみても一大興行事業であるといえる。

公演数と人気においてかくも顕著な劇団にも拘らず、宝塚は学術界においてまともに扱われておらず、特に演劇学においては国内外ともに、ほとんど注目されることはなかった。そこで、本書は、学際的なアプローチをもって、宝塚の歴史と文化について高まりつつある知的な好奇心と関心のほどを明らかにしようとするものである。女性だけからなる宝塚歌劇団の特性からして、カルチャル・スタディーズやジェンダー学の視点は欠かせない。しかし、本書の主たる目的のひとつは、宝塚をパフォーミング・アーツ（舞台芸術）として演劇学の中に位置づけ、宝塚を劇団組織として再検討することである。

宝塚歌劇の作品分析をする前に、「宝塚とはなにか」という根本的な問いを発しなければならない。1914 年に宝塚少女歌劇として始まったこのうら若い女性のみで構成される劇団は元来、阪急電鉄を民間企業として成功させた実

＊ 本論は、Makiko Yamanashi: *A History of the Takarazuka Revue Since 1914:Modernity, Girls' Culture, Japan Pop* (Brill/ Global Oriental, 2012) の Introduction の著者自身による翻訳・改訂である。

業家である小林一三（1873-1957）によって阪急宝塚線の乗客誘致のために作られた。湯の町宝塚は、家族揃って楽しめ、子女の情操教育にもなるような行楽地として構想された。新しい温泉施設は、椅子のある待合室や鏡のついた化粧台、宿泊施設、店舗、植物園があり、遊園地には動物園も併設された。モダンな施設として、室内プールも造られたのであるが、水温の温度調節がうまくいかなかったうえに、男女混浴ができなかった風紀上の理由から入場時間調整で不便が生じたことが主な理由で運営が行き詰った。そこでこのプールに板を張ってパラダイス劇場という名の舞台に改装し、少女達に歌舞劇をさせたのが宝塚少女歌劇の始まりである。

後述するように、宝塚はそれまでの女性演者を卑下する保守的な見解を覆すべき宿命を背負っていた。女性と子供達の新しい生活を反映した宝塚少女歌劇団は、中流階級の子女達を採用した。小林一三は実業家でありながらも、新しい文化創造に熱心な人物であり、女性と子供達が有益な消費者として台頭してくるのを見極めていたといえる。小林は、劇団と音楽学校の代表責任者として、舞台での技芸や礼儀作法に加え、少女達の個性を伸ばす教育を心掛けた。このようにして、宝塚は日本の「少女文化」の形成において最適な土壌を誂えたといえる。第4章でより詳しく考察するが、宝塚は日本の近現代を語るうえで欠かせない少女文化領域において重要な意味を持っている。

「近代性（モダニティー）」は定義が難しい概念である(註2)。ここでは、ライフスタイルにおいて既存の価値観や伝統的な判断基準に挑むような新奇性を示すのに用いる。国内外の要素を大胆に取り混ぜてできた新しい社会文化的な流行は、教育、メディア、ファッション、劇場を含む娯楽の領域に顕著に見られた。街として、劇場として、さらに学校としての宝塚は、これら全ての日本のモダニティーのみならず、世界的なモダニティーを顕在化していると考えられる。

小林一三が提唱したモットー「清く、正しく、美しく」を掲げる宝塚音楽学校は現在2年制で、和と洋の歌舞劇の技術を習得すべく授業が組まれている。宝塚の演者全員がこの学校の卒業生であり、生涯に渡って一目置かれる存在だ。今日では、15歳から18歳の女子のみが受験資格があり、合格者は退団まで結婚せずに舞台に専念する。このような専属の団員（「生徒」と呼ばれる）に加え、宝塚歌劇団は演出家、衣装デザイナー、舞台美術家、作曲家とオー

ケストラまで座付き抱えている世界でも稀なる劇団組織である。劇団は各 80 人程からなる 5 つの組で構成されている:即ち、花組（1921 －）、月組（1921 －）、雪組（1924 －）、星組（1933 －）、そして宙組（1998 －）である。このため、劇団は、オリジナルから海外ミュージカルに至るまで、年間を通じて幅広い演目を提供できる。5 組は、宝塚大劇場、バウホール（座席数 500 人程の併設劇場で、若手を育てる実験的な小作品を多く上演）、東京宝塚劇場で入れ替わり公演し、全国ツアーや時には海外公演を行っている。

20 世紀を通して、宝塚はその舞台における視覚的且つ物語的要素を通じて、日本の観客に広く国外の文化を紹介してきた。岸田辰彌は日本初のレヴューといわれる「モン・パリ」（1927）を演出し、続く白井鉄造の「パリゼット」（1930）は宝塚の綺羅やかなレヴュー様式を確立した。欧米で流行している音楽や振付けをいち早く取り入れた例には、例えば、当時フランスで流行っていたミスタンゲットのシャンソン、アメリカのフローレンツ・ジークフェルドのレヴュー演出などがある。1974 年、池田理代子の少女漫画『ベルサイユのばら』の舞台化の成功を機に、近年では国内外で人気の高まる日本のマンガ、アニメ、コンピューターゲームも取り入れる傾向にある。

奇遇にも、宝塚はマンガの大家、手塚治虫との関係が深い。宝塚大劇場の近くで育った手塚は子供の時から宝塚の舞台にインスピレーションを受けてマンガを描き、やがて宝塚歌劇が『ブラック・ジャック』や『火の鳥』を舞台化することになる。これらのマンガを原作とする作品群は、より広い日本の大衆文化の文脈へ宝塚を晒す。よって、日本のみならず、よりグローバルな視点で宝塚の魅力を分析する必要がでてくる。近年、宝塚は同性の劇団ということでジェンダー学からの視点はもとより、マンガやアニメ、さらにゲームとの関連でサブカルチャーの文脈で語られることが多くなってきている。

宝塚は、何をさておき先ずは舞台芸能であるが、今まで異なる角度から取り上げられてきた。国外では、アメリカのジェニファー・ロバートソンによる『踊る帝国主義（宝塚:日本近代におけるセクシャルポリティックスとポピュラーカルチャー）』（1998、翻訳版：2000）は人類学の視点から論じられているが、舞台としての宝塚への思慮に欠けている。ロバートソンは、父権的な日本社会に注目し、宝塚は大東亜共和圏時代（1932-45）において価値観が転覆す

る社会現象の一例としての見方を強く提示する。しかしながら、宝塚歌劇が女性だけでつくる舞台創作である前提を無視し、宝塚はレズビアニズムの文脈で捉えようとするロバートソンの議論には説得力が無い。実際、同性愛（レズビアニズム）とセックスは舞台芸能としての宝塚には基本的に無関係であるし、日本で宝塚を性的倒錯だと思っている人はほとんどいない。少なくとも、演者はもとより、生徒の家族、ファン、経営陣にそのような発想は毛頭ないだろう。

より最近の著書に、オーストラリアのレオニ・スティックランドによる『ジェンダー・ジムナスティックス』（2008）がある。スティックランドは、劇団で働いていた自身の経験を活かし、関係者への取材と観察を念入りに行い、宝塚を内部から読み解く。だが、「宝塚を日本女性の生活全般」[註3]に位置づけようとするため、どうしてもファンとジェンダーに焦点をあてる結果となっている。この本は、ロバートソンよりも幅広い視野を持たせ、ロバートソンの誤解、例えば、エロティシズムの偏った概念化を批判している。しかしながら、スティックランドもロバートソンも、宝塚がステージパフォーマンスであるという前提を踏まえていない。彼らは、宝塚がどのように舞台を創造し、なぜ演目や演出が現状のようなものなのかを論じてはいない。

イギリスのキム・ロンジノット監督によるドキュメンタリー『ドリーム・ガールズ』（1994）は、欧米における典型的なジェンダーとフェミニスト、そしてファン基盤の視点からの宝塚へのアプローチを反映している。これらは全て、宝塚の特異な性質（つまり、「女性だけの劇団」、「娘役に対しての男役」、音楽学校の厳格なシステム、特殊なファンの在り方など）に着目し、舞台作品そのものを分析するにはあまり役立たない。どれも著者自身のセクシャリィーとジェンダーの理解に基づいているが、舞台作品上のジェンダーとセクシャリィーは、子供や大人、男女といった生物的な性差を超える概念上の解釈が必要である。宝塚を舞台パフォーマンスとして論じるには、先ずこれらの概念を再構築し、いったい宝塚歌劇とは何であり、何を「上演（パフォーム）」するのか解き明かしていくことが大切である。

日本では、いままで充分な研究がなされていない宝塚歌劇について、既存のステレオタイプの見方を打破し、歴史的な見解を示そうとする試みがいくつかなされてきた。例えば、渡辺裕は単著『宝塚歌劇の変容と日本近代』（1999）

において宝塚が担ってきた社会文化的な役割を再評価し、日本のモダニティーの表象として注目し、近代における日本の価値判断の移行を示した。また、川崎賢子による『宝塚―消費社会のスペクタクル』は 20 世紀の消費社会の台頭のなかで宝塚がどう発展したかをバランス良くまとめている。それでも尚不足しているのは、海外と日本の舞台芸能の傾向の比較研究であろう。

藤原麻優子による論文「『マジシャンの憂鬱』へのアプローチ：宝塚のメタシアター」（2008）は、宝塚歌劇の「メタ・シアトリカリティー（超演劇性）」を指摘し、既成概念に捕われない、独立した作品分析の重要性を強調している。むしろ、藤原は、宝塚的と見なされる全ての前提や定義から自由に各作品を論じることが大切だという。作品そのものから分析を始めるほうが有意義だとするのである。彼女は、『マジシャンの憂鬱』（2007 年、月組）を研究対象に選び、シナリオ、歌詞、振付における‘メタ・シアトリカリティー（超演劇性）’を明らかにし、演出家の正塚晴彦がいかに宝塚様式に適合させながらも自身の葛藤を上演テキストに盛り込んだかを考察した。このアプローチは、シェイクスピア研究と同じく、宝塚歌劇を作り手の側から見ることで、演劇学のなかで語り得ることを示している。例えば、誰によってどのように物語が書かれ、演じられ、振りがつけられ、楽曲が作られ、その他もろもろの特徴が出来上がっているのかを解明していく。この手の研究は、舞台上演において何が特殊なのかを示し、「宝塚の要素」を照らし出す。宝塚歌劇の個別の全作品を分析知ることは無理だが、このアプローチは宝塚を演劇として論じることを可能にする。

しかし、宝塚歌劇の作品を完全に理解するため、または合理的に批評するためには、歴史的、文化的な解釈は不可欠である。著者の研究は、文化的且つ上演形態について考察する。この任務を遂行するために、ある特定の方法論を用いることは難しい。なぜなら、宝塚の全貌を一視点から理解することはできないからである。著者の論考が目指すのは、宝塚世界について先ず念入りな調査に基づく情報を提供することである。歴史的背景を把握してこそはじめて、この女性だけの劇団がどのようにして生まれ、発展したかを明らかにすることができる。従って、本書は複数の視点から宝塚を考察する。例えば、インターカルチャリティー（文化の複合性）、ハイブリッディティー（雑

種性）とアシミレーション（同化の傾向）について。それから、都市と郊外、公私、伝統と近現代性、国内外、老若男女など相反する事象の混合について。こうすることで、宝塚における近代性というものは、単なる概念に留まらず、これら多彩な異なる事象のぶつかりあいから生まれた感受性でもあることを提示する。

宝塚に関して広範囲の興味から考察するにあたり、本書は5章から構成されている。一貫した方法論は用いられていないが、宝塚が創出する文化的イメージが本研究の焦点のひとつである。各章どれをとっても単独で、より踏み込んだ論文を書くに価するのだが、この一冊では宝塚の全貌をできるだけ明らかにし、総括的であるゆえの限界を意識してなお可能な限り問題提起をするつもりである。宝塚は､その演劇性と視覚的特徴において万華鏡的な媒体であり、将来の学際的研究にとって多くの論点と課題へ誘ってくれるだろう。著者の意図するところは、これらの異なったアプローチを交差させ、できるだけ補充させ合うことである。先ずは、歴史的観点から宝塚の発展を見直し、徐々に複雑且つ興味の尽きない日本近現代の社会文化的背景に照らして、さらに適宜、より世界的な背景に即して、その文化的立ち位置を考察していく。

本書の構成は以下のようになっている。

第一章：宝塚の黎明期

■ 宝塚の誕生
— 小林一三と阪急事業の誕生
— 宝塚：温泉、プール、そして劇場
— 百貨店と阪急
■ 新しい時代の新しい演劇
— 演劇改良の流れのなかでの宝塚歌劇
— 大劇場主義
— 女性の新しい職業として演じるということ
■ 発展の光と影
— 戦争の足音

— 戦争のためのパフォーマンス：人々の心を掴んだレヴュー
— 初めての海外公演
— 国策の下で

第二章　宝塚のメカニズム

■ 女子のための学校
— 宝塚音楽学校（T.M.S.）
— 教育方法と方針：清く、正しく、美しく
— タカラジェンヌ：女学校生活
— 音楽学校から歌劇団へ
— 退団までの若き精神
■ 組織の運営形態
— 舞台を創る人々とアーカイブ構築
— 阪急と協賛企業の宣伝方法と競合
—「夢の工場」のイメージ戦略

第三章　宝塚の舞台芸術：‘ファンタジー・アドベンチャー’

■ タカラヅカ・スタイルの形成
— 異文化の吸収と土着化
— 歌舞伎ほか伝統芸能の継承から新たな伝統の確立
— 西洋＋東洋＝ハイパー・エキゾチック・ユートピア？
■ 中性性の魅力
— 男役と女形
— 舞台芸術の美的遊離感覚
■ 劇製作術におけるエソス
— 視覚的・言語的シンボリズムとメタファー
— 人間ドラマと愛の普遍性
— マンネリズム：間テキストのコラージュ

第四章：少女文化領域における大正モダン

■ タカラジェンヌとモガ

―「新しい女」からモダンガールへ

― 新奇な装束と慣習

■ 人格の発見とアイデンティティーの探求

― 浮遊する少女達：理想化された少女としての「乙女」

― 恋愛：輸入された愛の観念

― 女友達の文化：エス関係と呼ばれる少女達の絆

■「ファンタジー・アドベンチャー」における観衆

― なぜ女性客の心を掴むのか

― ファン世界：忠実、育成、家族的・友達的仲間意識

― 理想の自分と理想化される他者

第五章：少女文化の系譜と現代の新しい文脈におけるタカラヅカ

■ 少女マンガとの交互作用

― 手塚治虫と宝塚

― マンガの舞台化と、舞台のマンガ化

― 夢と愛と成長を求めて

■ 大衆文化のユートピアとディストピア？歪曲される少女と宝塚への視線

― カワイイ：多種多様な「かわいさ」と宝塚への適合性

― カワイイの変容：オタク、ヤオイを超えて

― 変化する受容と表現

― 夢の再生産

このように、今や演劇の分野に限らず、広く大衆文化レベルで有名になり、影響力がある女性だけの劇団宝塚は、20 世紀を通してみる日本の近代化とグローバル化の複雑な過程を理解する上で欠かせない様々な問題を提示する。2014 年、宝塚歌劇団は百周年を迎える。これからはその一世紀の歴史を顧みて総括的に、そして更に現代の視点から国際的且つ学際的に、益々宝塚研究が進むことを期待したい。

註

1：宝塚歌劇団 2009 年度提供、2008 年の記録による。
2：例えば、Calinescu（1977）。
3：Stickland, 2008, p.3.
4：ここでの中性性とは、生物的な男女の差異を超えた質的な性質についていう。‘同性具有’という表現は、ジェンダーに関係なく、身体的にバイセクシャルとして男女の性を共有することを意味するので意図的に避ける。

上記言及文献

川崎賢子『宝塚―消費社会のスペクタクル』講談社、1999 年
藤原麻優子「『マジシャンの憂鬱』へのアプローチ：宝塚のメタシアター」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 54 号、2008 年
渡辺裕『宝塚歌劇の変容と日本近代』新書館、1999 年
Calinescu, *Matei, Five Faces of Modernity*, Indiana University Press, Bloomington and London, 1977
Robertson, Jennifer, *Takarazuka: Sexual Politics and Popular Culture in Modern Japan*, University of California Press, Berkeley, 1998
堀千恵子訳『踊る帝国主義―宝塚をめぐるセクシュアルポリティクスと大衆文化』現代書館 , 2000 年
Stickland, Leonie Rae, *Gender Gymnastics: Performing and Consuming Japan's Takarazuka Revue*, Trans Pacific Press, Melbourne, 2008

<ABSTRACT>

Introduction for *A History of Takarazuka Revue Since 1914: Modernity, Girls' Culture, Japan Pop*

YAMANASHI Makiko

Founded in the hot-spring resort town of the same name in 1914, Takarazuka is a kaleidoscopic medium, both in terms of its theatricality and visual characteristics. Yet, despite its prominence and popularity, it has not received the academic attention it deserves, especially in the context of theatre studies. This book, therefore, by taking an interdisciplinary approach, endeavours to fill this gap through a detailed analysis of the Takarazuka Revue Company's history, educational traditions and theatrical ethos viewed from the prism of Japan's modernization and globalization in the twentieth century. Its important relationship to Japanese popular culture, especially in the fields of manga and fashion are also given due consideration.

Furthermore, because of its unique features as an all-female performance art appealing mostly to female Japanese audiences, the study also includes an in-depth consideration of its continuing success, way of life and wider social impact from both cultural and social perspectives.

A History of the Takarazuka Revue Since 1914 will have wide interdisciplinary appeal, as well as in the particular context of Japanese Studies. It is divided into five chapters: l. The Formative Years of Takarazuka; 2.The Mechanisms of Takarazuka; 3. The Stage Art of Takarazuka 'Fantasy Adventure'; 4. The Taishō 'Modern'; in the Female Domain of Shōjo Bunka; 5. Takarazuka in the Modern Heritage of Girls' Culture and Beyond.